
雨宿り

梅金魚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨宿り

【Zコード】

N6218A

【作者名】

梅金魚

【あらすじ】

仕事帰り、気まぐれで寄り道した本屋から出ると、外は予想外の大雨だった。しかたなく軒先で雨宿りをしていると…

平氣で嘘をつく奴がいる。それも日常的に、大勢の人間に対してだ。

つい数分前、軒先のビニール屋根からすたすたと滴り始めた雨垂れは、ついに点から線へと変わり、雲ひとつ無かつた空は、まるで昼夜逆転したように重く濁つた。

今更後悔してもちろん遅いのだが、数十分前の俺はなぜか今日に限つて、普段素通りしているこの本屋で、少し時間を潰して帰ろう、と思つてしまつたのだ。

やつぱり真っすぐ家に帰るんだった。そうしていればきっと今頃、風呂で今日の仕事の疲れを取りつつ、タイルの溝にへばり着いた力ビでも眺めていたことだろう。数十分前の俺よ、お前の選択は間違つていた。

つづづく自分の気まぐれと、今朝テレビの中から、「今日は傘を持たなくともいい」と満面の笑みで嘘の情報を吹き込んだお天気キヤスターに腹が立つ。

どれくらいここに留まつただろうか。もう雨が止むことを願うのも忘れてぼんやりしていると、若い女が店内から出てきた。小さな顔に幼さの残る大きな瞳。服装もひらひらしていて、可愛い、という表現がよく似合う女の子だ。

彼女は俺から数歩分離れた場所で足を止め、止む気配のない雨を眺め軽くため息をついた。すると、そのため息に機嫌を悪くしたのか、急に雨が強さを増し、まるで彼女に抗議するかのように雨音が大きくなつた。

ああ、これでまた当分帰れなくなつた。しかし、可愛らしい女の子と一人きり、本屋の軒先で雨宿り。まるで恋愛ドラマの主人公になつたようで悪い気はしない。

ところが、彼女はハンドバッグの中を「じそ」と漁り、「これまた女の子らしい。ピンクの折り畳み傘を取り出した。俺はどうやら主人公にはなれないらしい。

滝のように地面に叩き付けられる雨は濃い霧を立て始め、田に映る景色の輪郭を溶かしていった。

.....

傘を広げ終えた彼女と田が合った。

田があつたというよりも、視線に気付き俺の顔を見た、と呟つべきか。無意識のうちに彼女を凝視してしまっていたらしい。

変な人と思われただろうか？

「あの……」

彼女は少々申し訳なさそうに俺に歩み寄り、申し訳なさそうな声で言つた。

「私、駅に向かうんですけど、もしよかつたら一緒に行きませんか？傘ちっちゃいから少し濡れちゃうかもしないけど……」

なんということだろ？。神様は俺を主人公に選んだらしい。

近くで見る彼女はさらに申し分なく可愛かった。

小さな傘に肩を寄せ合ひ、いろんな話をした。

彼女は二つ年下で、19歳の女子大生だった。見た田に違わず、人懐っこくて明るい女の子だった。

駅までの距離はそれほど長くはなく、別れの時間はすぐになってしまった。

少し名残惜しそうにしていた彼女は、別れ際に「電話番号を教えて下さい」と恥ずかしそうに言つた。

「一人が恋に落ちるのにさほど時間はかからず、一人は付き合いつ」とになつた。

それからの俺の生活は、幸せそのものだつた。

一人暮らしの俺の家に毎日のように通い、コンビニ弁当ばっかりじや体に悪いと、料理を作つてくれた。

一人でいろんなことをした。映画を見たり、ドライブしたり、一日中部屋でのんびり過ごしたり、冬には温泉旅行にも行つた。彼女とたくさん時間を使い、思い出の数もどんどん増えていつた。

しかし、別れは突然やつてきた。

楽しい時間はあつと言つ間に過ぎて行き、付き合い始めて1年が経とうとしていた頃。

俺たちこれからもずっと一緒にやな。そう言つと彼女は少し困った顔をして、語り始めた。

「あなたにずっと隠していたことがあるの…もつあなたとは一緒にいられない」

予想外の反応に目を丸くしていると、彼女はこう続けた。

「私、本当はこの星の人間じゃないの。私は、この星の悪の組織と戦う為にモエモエ星からやつてきた、戦うメイドさんだったのです！」

そう言つと、彼女の体が眩しい光に包まれ、よくテレビで見かける、秋葉原のメイド喫茶の女の子のような格好に変身した。

そんなことがあるはずがない。なんだこの展開は。

我に帰ると、まだ空から降つてくる滝が轟音を立てており、田の前の景色はなにも変わつてはいなかつた。

どれくらい時間が経つたのだろう？それすらも理解できないほど妄想の海に溺れていたようなのですが、彼女が立つていた場所に目をやると、彼女は広げ終えた折り畳み傘のカバーをハンドバッグにしまつてゐるところだつたので、どうやらほんの数十秒しか経つていなにようだ。

彼女を眺めつゝ、自分の妄想に馬鹿馬鹿しさと情けなさを感じてゐるとい、彼女が少々申し訳なさそうに歩み寄つてきた。

「あの…」

まさか。

「私、駅に向かうんですけど、もしよかつたら一緒に行きませんか？傘ちつちつやいから少し濡れちゃうかもしれないけど…」

小さな傘に肩を寄せ合ひ、いろんな話をした。

雨は少しも弱まつていなゝが、彼女と歩く駅までの道のりはとも居心地がよかつた。

「あのさ」

「はー？」

「モエモエ星つて知つてる？」

「なんですかそれ？」

「いや、なんでもない」

彼女は突然変なことを言い出した俺の顔を見上げ、笑つた。

「面白い人なんですね」

俺は、今朝の嘘つきに心から感謝した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218a/>

雨宿り

2010年12月8日18時47分発行